

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修 士 論 文 概 要 書

論 文 題 目

日本社会で活躍する非母語話者の音声戦略
—外国人歌手の日本語発音を中心として—

岩崎 裕子

2015年9月

第1章 序論

本研究は「音楽ビジネス」という社会実践において、外国人歌手の歌唱や発話に見られる母語の影響を受けた日本語発音（以下、外国人なまり）が、周囲からどのように捉えられ、仕事に生かされているのか、さらに外国人歌手自身がどのように考えているのかを包括的に探求する実証研究である。

第1章では、本研究の研究背景、問題意識、研究目的について述べる。

本研究の研究背景として、近年の音楽業界における外国人歌手の活躍という「社会現象」を挙げる。日本の音楽ソフト市場全体が縮小傾向にある中（日本レコード協会 2015）、K-POPに代表される外国人歌手の躍進が続いている。K-POPブームは2009年頃から急速に拡大し（久保田 2012；古家 2013）、今やひとつの音楽ジャンルとして定着するまでになった。最近では韓国勢のみならず、英語母語話者歌手の活躍も見られる。これら外国人歌手の活躍は、各メディアで繰り返し取り上げられ、ファンではない一般の母語話者までもが日常的に外国人歌手の姿を目にするようになってきている。

近年の外国人歌手の特徴は、「日本を活動拠点としている」「日本語で歌っている」「日本語で活動を行っている」ことである。縮小傾向にあるとはいえ、現在も世界第2位を誇る日本の音楽市場に切り込んでいくために、外国人歌手は日本語歌詞の歌を歌い、日本語で宣伝活動を行っている。日本で成功するために、今や外国人歌手の日本語習得は必要不可欠なものになりつつある。

本研究の問題意識として、以下の4点を挙げる。1点目は、前述の社会背景から、日本で活躍する歌手の外国人なまりに対する母語話者の印象評価を探りたいという筆者の関心である。2点目は、日本語学習者の多様化が進む中、歌手のような音声的専門職業の日本語研究がほとんど見当たらないことである。3点目は、ひとりの日本語教師として、学習者の個性やキャラクターを表す音声をどう指導したらいいのものかという筆者の悩みである。4点目は、筆者が外国人歌手に日本語指導を行った際の反省から、外国人歌手に必要な日本語教育とは何かを探りたいという欲求である。

これらの問題意識から、本研究は「音楽ビジネス」というひとつの社会実践の中で、現実の意味を持って存在している、ある音声のあり方を、包括的に見ていこうとする。本研究は、近年の日本語音声学において注目を集める「社会音声学」（城生 2010）の考え方に立つことができるものである。本研究が追及するリサーチクエスション（RQ）は以下の通りである。

RQ1. 外国人歌手の日本語発音を、ファンはどのように捉えているのか

RQ2. 外国人歌手の日本語発音を、音楽業界関係者はどのように捉えているのか

RQ3. 外国人歌手は、自身の日本語発音をどのように考えているのか

第2章 先行研究

日本語教育分野において、歌手の外国人なまりに関する先行研究は管見の及ぶ限り見当たらない。そのため、本章では本研究に関連が強いと考えられる四つの研究領域について整理しながら、本研究の立ち位置を明らかにする。

まず、エンターテインメント業界で活躍する外国人の日本語研究をまとめ、羽澤 (2008) の研究が本研究に最も近い存在であることを示した。次に、学習者の日本語の発音に対する母語話者評価研究をまとめ、小河原 (1993)、金 (2009) らの先行研究が「外国人なまりはマイナス印象に働く」という結果であることを示した。続いて、日本語の歌唱音声に関する研究として、言語構造面と音楽情報処理分野の研究をまとめた。最後に、「喋り」に見られる音声表現と印象に関わる研究として、内田 (2005)、勅使河原 (2008)、定延 (2006) らについて、本研究との関連を示した。

これらを整理した上で、本研究の位置づけについて、以下のように示した。

第一に、本研究は音楽業界で活躍する外国人歌手の日本語発音に着目する、新機軸の研究である。第二に、本研究は社会音声学 (城生 2010) の理念に基づき、「音楽ビジネス」というひとつの社会实践の中で、外国人歌手の日本語発音がどのような意味を持つのかを包括的に探る、実証研究である。第三に、本研究は歌手の外国人なまりがどのような印象をもたらすのかという、母語話者評価研究の側面を持つ (第3章)。また、外国人歌手を世に送り出す音楽業界関係者が、歌手の外国人なまりをどのように捉え、仕事に生かしているのかを探る、ケーススタディの側面も持つ (第4章)。さらに、日本社会で活躍する外国人歌手が、自身の日本語発音をどう考えているのかを探る、ライフストーリー的側面も持つ (第5章)。第四に、本研究は上記の3調査を組み合わせ、社会实践の現場における非母語話者の日本語音声の使用実態のひとつを浮き彫りにし、日本語音声教育における新たな視座を得ようとするものである。

第3章 外国人歌手の日本語発音を、ファンはどのように捉えているのか

第3章では、「音楽ビジネス」という社会的枠組みのなかで、外国人歌手の日本語発音に対するファンの意識を明らかにした。ファンを調査対象としたのは、消費者のニーズ分析の

意味合いからである。調査では、20～50代の日本語母語話者28名に外国人歌手の日本語音声の印象に関する質問紙調査を行い、本調査における調査協力者（ファン）9名を選出した。次に、質問紙調査の回答について詳しく聞くため、調査協力者全員にフォローアップインタビューを行った。最後に、両調査の結果を照らし合わせ、佐藤（2008）を参考に定性的に分析した。調査の結果、調査協力者（ファン）の意識に下記四つの特徴を得た。

- (1) ファンは歌手の外国人なまりを、「歌」ではなく主に「喋り」から感じ取っている
- (2) 発音で気になるのは、「単音」「リズム」「イントネーション」である
- (3) ファンは歌手の外国人なまりを、「プラスイメージ」で捉えている
- (4) 外国人歌手の発音の上達については、現状維持希望派と向上希望派に分かれる

続いて、ファンの外国人なまりに対する「プラスイメージ」を構成する要素について、以下六つの上位概念を生成した。（ ）内はその下位概念である。

- (1) 努力と成長（見える努力／見えない努力／成長）
- (2) 感謝と尊敬（感謝／尊敬）
- (3) 苦勞と共感（苦勞／共感）
- (4) かわいさと親しみ（かわいさ／親しみ）
- (5) 外国人らしさ（個人の嗜好／特殊性／独占欲）
- (6) ギャップ（完璧さと未熟さ／歌唱と発話／以前と現在）

本調査の結果、調査協力者は全員、ファンである歌手に外国人なまりがあることを認識し、「歌」ではなく主に「喋り」から外国人なまりを感じ取っていることがわかった。さらに、全員が外国人なまりを「プラスイメージ」として捉えていることがわかった。「プラスイメージ」を構成する要素として、上記六つの上位概念を得た。ただし、今後の発音の上達については、現状維持を希望する者と、発音の向上を望む者の二つに分かれた。また、外国人なまりが外国人らしさをあまりにも強く伝え過ぎてしまった場合、プラス印象がマイナス印象に変化する可能性があることも示された。

第4章 外国人歌手の日本語発音を、音楽業界関係者はどのように捉えているのか

第4章では、外国人歌手の日本語発音に対する音楽業界関係者の意識と、仕事への生かし方について明らかにした。調査では、「マネージャー」「ディレクター」など外国人歌手と

仕事上関わりの深い音楽業界関係者 4 名を調査協力者として、半構造化インタビューを行った。得られたデータは、佐藤（2008）を用いて定性的に分析した。

調査の結果、調査協力者は歌手の外国人なまりを「魅力」と捉え、アーティスト戦略に生かしていることがわかった。その戦略には、現状の外国人なまりを生かそうとする面と、意識的に統制しようとする二つの面が見られた。調査協力者は、担当歌手の活動に「流暢な喋り」や「コミュニケーション力」が重要であると考えていたが、それらに大きく関わる「発音」の重要性については認識していなかった。担当歌手の今後の展開に、発音能力の向上は必要だと考えていたものの、外国人なまりがファンに好意的に受け取られている現状では、この問題は先送りにされる傾向が見られた。

これらの結果から、歌手の外国人なまりは、歌手の「魅力」として戦略に利用されていること、関係者の手によって魅力的に見せられている部分もあること、歌手の発音能力の向上はこの先の課題とされていることが明らかになった。

第 5 章 外国人歌手は、自身の日本語発音をどのように考えているのか

第 5 章では、外国人歌手自身の日本語発音に対する意識を明らかにした。調査では、K-POP 新人男性グループメンバー 4 名と中国人女性演歌歌手 1 名を調査協力者とした。調査協力者の都合により、K-POP 新人男性グループメンバーには質問紙調査、中国人女性演歌歌手には半構造化インタビューを行い、佐藤（2008）を用いて定性的に分析を行った。

調査の結果、日本語基礎～初級者の K-POP 新人男性グループメンバーは、発音に対する自己評価と担当者の評価がほとんど一致しなかったが、中級者の中国人女性演歌歌手は自己評価と担当者の評価が一致し、自身の発音を冷静に見ていることがわかった。難しい発音については、基礎レベルの歌手には自覚がなく、上級者ほど苦手な発音を意識していた。ただし、自覚はできても自己修正ができないという「ジレンマ」や、母語話者との差異を指摘されても違いがわからないという「もどかしさ」を抱えていることがわかった。日本語発音に関するビリーフは、K-POP 新人男性グループメンバーは日本人のように流暢に喋れることや、自由な自己表現ができることを目標に努力を重ねていた。すでに流暢に喋ることができる中国人女性演歌歌手は、「歌」では完璧な発音を目指し、「喋り」では外国人なまりをコミュニケーションに生かそうという、発音の使い分けの意識が見られた。

これらのことから、「音声」を生業とするプロの歌手であっても、第二言語の音声習得は難しいこと、自身の発音に対し複雑な思いを抱えていることがわかった。

第6章 総合的考察と結論

第6章では、これまでの三つの調査結果を振り返った上で、ファン（調査1）、音楽業界関係者（調査2）、外国人歌手（調査3）、それぞれの意識の関連性について明らかにした。それらを踏まえた上で、総合的考察を行った。続いて、リサーチクエスチョンに対する答えを提示し、本研究の結論を述べた。さらに、日本語教育への示唆、今後の課題について述べた。

まず、三つの意識の関連性について述べる。ファンと音楽業界関係者の意識には、3点の共通点と1点の相違点が見られた。次に、音楽業界関係者と外国人歌手の意識には、2点の共通点と2点の相違点が見られた。さらに、外国人歌手とファンの意識には、2点の共通点と1点の相違点が見られた。共通点の方が多いものの、意識のずれである相違点も確認された。

以上の結果を踏まえ、総合的考察として3点を挙げた。第一に、「音楽ビジネスにおける外国人なまりの意味」として、ファンが外国人歌手に対して持つ「ステレオタイプ」について言及した。第二に、「外国人なまりと社会の意識」として、外国人なまりが有効に働く職業や、外国人に「外国人らしさ」を求める日本社会の問題について述べた。第三に、「外国人歌手の『喋り』の日本語発音習得が進まない要因」として、「音楽ビジネス」という環境下では発音の自然習得は難しく、意識的・体系的な指導が必要であることなどを述べた。

本研究の結論として、以下の4点を挙げた。1点目は、外国人なまりは職種によっては評価される場合があるという「外国人なまりの有用性」である。これにより、本研究は先行研究が示した「非母語話者のなまりはマイナス印象を与える」という主張とは異なる視点を示すものとなった。2点目は、歌手の外国人なまりはファンに好印象をもたらし、歌手の個性やキャラクターイメージと強く結びついているという事実である。3点目は、外国人歌手の音声戦略の課題についての提言である。4点目は、「音楽ビジネス」という社会実践の現場では、外国人歌手の発音の自然習得には限界があり、発音能力の向上を目指す際には、現場に即した適切な音声指導が必要であろうという指摘である。

日本語教育への示唆として、以下の3点を挙げた。1点目は、学習者の個性を尊重する日本語音声教育の実践についてである。2点目は、日本語教師の音声指導範囲について、学習者と教師の関係性の中で、学習者にふさわしい発音を共に見つけ出していくことの大切さである。3点目は、様々な日本語教育実践の蓄積の重要性についてである。

最後に、今後の課題として以下の三つを挙げた。まず、外国人歌手を「ひとりの学習者」

として捉え、より深い心情を明らかにしていく「ライフストーリー」研究である。次に、歌手の外国人なまりの印象に関する追加調査として、ファンではない一般の母語話者に対する調査を行うことである。最後に、本研究の直接の課題ではないが、歌唱と発話の音声習得の関連性、音感と音声習得の関連性について探ることである。

参考文献

- 内田照久 (2005). 「音声中の抑揚の大きさと変化パターンが話者の性格印象に与える影響」『心理学研究』76 (4), pp.382-390. 日本心理学会
- 小河原義朗 (1993). 「外国人の日本語の発音に対する日本人の評価」『東北大学文学部日本語学科論集』3, pp.1-12. 東北大学
- 金菊熙 (2009). 「外国人訛りに対する母語話者の反応」『言語情報科学』7, pp.109-123. 東京大学
- 久保田泰平 (2012). 「“K-POP” はいかにして日本に広まっていったのか？」『ニュー・コリアン・ミュージック・ガイド』 pp.22-25. 音楽出版社
- 定延利之 (2006). 「ことばと発話キャラクタ」『文学』7 (6), pp.117-129. 岩波書店
- 佐藤郁哉 (2008). 『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社
- 城生佰太郎 (2010). 「社会音声学序説—ラングとパロルの中間に関する一考察—」『文教大学文学部紀要』23 (2), pp.87-98. 文教大学
- 勅使河原三保子 (2008). 「音声による人物像の表現と知覚」『言語』37 (1), pp.60-65. 大修館書店
- 羽澤志穂 (2008). 「非母語話者俳優の台詞の音声に対する母語話者の評価と日本語音声教育」早稲田大学大学院 日本語教育研究科 修士論文
- 古家正亨 (2013). 『ディスク・コレクション K-POP』シンコーミュージック

参考サイト

- 日本レコード協会 (2015). 「日本のレコード産業 2015 年度版」, 2015-4-28, <<http://www.riaj.or.jp/issue/industry/pdf/RIAJ2015.pdf>> 最終閲覧日 2015-6-1